19 世紀後半から 20 世紀初頭までにおけるドイツへのツタの伝播と普及について

The Introduction and Spread of Japanese Ivy (*Parthenocissus tricuspidata*) to Germany from the Latter half of the 19th Century to the Beginning of the 20th Century Inclusive

中尾裕介*

Yusuke NAKAO

摘要：東アジア原産のツタ (*Parthenocissus tricuspidata*) は、西洋諸国に広く普及し、西洋の風景の一要素となっている。本稿では、ツタの伝播と普及の経緯を明らかにすることが、来歴を踏まえた利用並びに観賞を行なう上で、また植物の人為的な移動の実際を認識する上で有意義であるという観点から、その一環として、ドイツへの伝播と普及の初期の経緯を、当時発行されていた造園・園芸関係雑誌の記事に基づき明らかにしようとした。その結果、ドイツへのツタの伝播は、19 世紀後半にツタが普及したイギリスやアメリカへの伝播とほぼ同時期であったが、19 世紀中には普及が進まず、20 世紀初頭になって、初めて一般に普及したことが明らかとなった。

1. はじめに

東アジア原産のツタ (*Parthenocissus tricuspidata*) は、西洋諸国に広く普及し、西洋の風景の一要素となっている。ツタがどの様にして、西洋諸国に広まっていったのか、その来歴を明らかにすることは、来歴を踏まえた利用並びに観賞を行なう上で、また植物の人為的な移動の実際を認識する上で有意義であると考えられる。本稿は、このような観点から、西洋へのツタの伝播と普及の経緯を明らかにしていく一環として、ドイツへのツタの伝播と普及の初期の経緯を、当時発行されていた造園・園芸関係雑誌の記事に基づき、明らかにしようとするものである。

ツタは現在、ヨーロッパ各地で帰化状態になっているとされているが¹⁾、これまでの文献検索²⁾の結果では、植物の伝播と普及に関して特にツタを対象として取り上げた文献はなく、また、中国およびその周辺からヨーロッパへの全般的な植物の導入に関する Bretschneider の研究³⁾では、ツタについては、ヨーロッパ圏への最初の導入とされる日本からイギリスへの導入は記されているが、その他のヨーロッパ各地での導入の記述はないので、ドイツへのツタの伝播と普及に関し、検討する意義はあると考えられる。

対象とする年代は、ドイツに初めてツタが導入されたと考えられる 19 世紀後半から 20 世紀初頭の第一次世界大戦前までとした。対象地域はドイツであるが、ドイツ連邦からドイツ帝国に至る時代であるため、領域は現在より広く、またオーストリアも含めた。

調査対象とした造園・園芸関係雑誌⁴⁾は、対象とする年代内にドイツにおいて発行されたもので、国内に所蔵され、学名による検索が可能な索引のあるものである。そのうちツタに関する記事を抽出できたものは、次のとおりである。(先頭部分の記号は、以後の誌名略号を示す。)

- BZ = Botanische Zeitung, Berlin & Leipzig. (KR)
GF = Gartenflora, Erlangen(1852-1873),
Stuttgart(1874-1885), Berlin(1886-). (KR)
GK = Die Gartenkunst, Frankfurt a. M.. (OS)
GW = Die Gartenwelt, Berlin. (OS)
GZ = Garten-Zeitung; Monatsschrift für Gärtner und
Gartenfreunde, Berlin. (KH)
HB = Handelsblatt für den Deutschen Gartenbau, Berlin. (OS)

- HG = Der Handelsgärtner, Leipzig. (OS)
IG = Illustrierte Garten-Zeitung, Stuttgart. (OS)
IM = Illustrierte Monatshefte für die Gesamt-Interessen
des Gartenbaues, Stuttgart. (OS)
MD = Mitteilungen der Deutschen Dendrologischen
Gesellschaft, Bonn. (KN)
MG = Möller's Deutsche Gärtner-Zeitung, Erfurt. (OS)
MV = Monatsschrift des Vereins zur Beförderung des
Gartenbaues in den königlich preussischen Staaten für
Gärtnerei und Pflanzenkunde, Berlin. (KH)
OG = Österreichische Garten-Zeitung, Wien. (OS)
WI = Wiener Illustrierte Garten-Zeitung, Wien. (OS)
WS = Wochenschrift für Gärtnerei und Pflanzenkunde,
Berlin. (OS)
WV = Wochenschrift des Vereins zur Beförderung des
Gartenbaues in den königlich preussischen Staaten für
Gärtnerei und Pflanzenkunde, Berlin. (OS)
ZG = Zeitschrift für Gartenbau und Gartenkunst, Neudamm. (OS)

※末尾の()内は調査した文献の所蔵場所を示す。(OS: 岡山大学付属図書館資源生物科学研究所分館, KH: 京都大学付属図書館, KR: 同理学部動物学植物学図書室, KN: 同農学部森林科学図書室)

ツタの記事の抽出にあたっては、索引を利用し、学名によって検索を行なった⁵⁾。抽出した記事の総数は 76 件であった。以下本文中では、(誌名略号, 巻, 頁)の形式で、記事の掲載箇所を示す。

2. ドイツへのツタの伝播

ヨーロッパへのツタの伝播については、はじめに述べたように、通常イギリスへ伝播したものが最初とされ、1862 年のこととされている⁶⁾。これは、1868 年にイギリスのヴィーチ商会から、*Ampelopsis Veitchii* 及び *Ampelopsis japonica* という名で一般に売出されるものになったものである。しかし、1859 年の記事 (WS, 2, 342) では、ムスカウの庭園⁷⁾の一画に造成中の樹木園のために収集された植物の一覧表が掲載されており、その中に現在ツタとされている植物 (*Ampelopsis Roylei* Hort.)⁸⁾ が挙げられている。従って、ドイツでは、イギリスのヴィーチ商会

*日本造園学会正会員

よりも早く、別の経路で、ツタが導入されていたと考えられる。*Ampelopsis Roylei* Hort. の入手先は、ベルリン植物園とされているが、これまでの調査では、それ以上のことは分かっていない。

その後、イギリスのヴィーチ商会からツタが売出されると、ただちに、1868年(GF,17,375)に、ヴィーチ商会のカatalogにに基づき、ツタを紹介する記事が掲載されている。1869年の春の記事(WV,12,107-8)では、ツタ(*Ampelopsis tricuspidata* S. et Z.)は、始めのうち*Ampelopsis Veitchii*や*Vitis japonica*の名で売出されたものであるとされているので、発売初年にはもう、ヴィーチ商会からのツタが、ドイツに入ってきていたものと考えられる。

1871年の記事(WV,14,361)には、主として最近20年間に日本や中国から導入され、たいていはまだ全く普及していない植物について、養樹園で6年間栽培試験が行われてきた植物の一つに、ツタ(*Ampelopsis tricuspidata*)が挙げられ、更にツタに関して、既に他の幾つかの名前で売出されているとされている。このことから、ヴィーチ商会によって一般に売出される以前に、*Ampelopsis tricuspidata*の名で導入されていたことが分かり、更に*Ampelopsis Roylei* Hort. の導入経路とは別の経路がある可能性もある。

例えば、1870年の記事(WV,13,88)では、*Ampelopsis Roylei*または、*Ampelopsis Royleana*と呼ばれている植物が、オランダでは、*Ampelopsis japonica*とも呼ばれているとの伝聞に基づき、それが事実であれば、その植物はツタ(*Ampelopsis tricuspidata*)であろうと述べられている。従って、この頃には、これらの植物が、互いに同じであることがはっきりとは認識されていなかったことが分かり、これらが別の経路で導入されたものである可能性は高いと考えられる。

以上、ドイツへのツタの伝播については、複数の経路があることが分かったが、最初にドイツにもたらされたのは、いつのことであり、どのような経路だったのかについては、少なくとも1859年以前には伝播しており、それはヴィーチ商会以外の経路であることまでしか明らかにできなかった。今後、更に検討したいと考えている。

3. ドイツにおけるツタの普及過程

まず普及の概況を述べ、続いて当時のツタの評価の視点、利用形態、及び繁殖方法について述べる。

(1) 普及の概況

上述のとおり、ドイツではツタは、1870年頃には既にいくつかの名前で売出されていたが、まだほとんど普及していなかった。この頃までの記事に示されたツタの具体的な植栽地としては、先に述べたムスカウの樹木園、ベルリン植物園のほか、1871年の記事(WV,14,361)に、サンスーシー宮園(ポツダム)の名が挙げられ、一部の植物園や大庭園には植栽されていたことが分かる。

1873年の記事(GF,22,198)で*Vitis inconstans*の名で紹介された際には、ヨーロッパではまだ栽培されていないようだとしており(ただし別植物と考えられていた可能性もある)、当時はドイツでは、一般に見かけられるものではなかったと推測される。

1878年になると、プロイセンの造園促進協会の花卉栽培及び促成栽培委員会の会議(1878. 4. 8)において、推薦されるべき魅力的なツタ(*Ampelopsis Veitchii*)についての注意が喚起されたことが報じられ(MV,21,395)、専門家には注目されていたことが分かる。

その後、1880年代から、1890年代へかけてのツタを紹介する記事には、ツタの様々な長所にもかかわらず、ドイツではわずかしか普及していないことが不思議、或は、残念であるという表現

がしばしば見られ(1882年 IM,1,185-86; 1888年 WI,13,163; MG,3,122; 1892年 MG,7,8; 1894年 ZG,12,118; 1896年 WI,21,223-24; 1897年 WI,22,239-40; GF,46,541-42)、造園・園芸関係者の啓蒙努力にもかかわらず、なかなか普及しなかったことが窺える。特に1888年の記事(MG,3,122)では、これほど長い間、少なくともドイツにおいては、無名のままであり得たことは、理解できないとされ、更に、1897年の記事(GF,46,541-42)でも、もう長い間それにふさわしいほどは普及するに至っていないとされている。一方、同じ1897年の記事(MD,I,252)には、ツタをあまりに多く使い過ぎることに注意がなされている。この頃既に、茂り過ぎの例が見られ、否定的な見解もあったことがわかる。

しかし、この間の記事には、同時に、ドイツでの植栽事例が示されており、少しずつは利用されていたことが分かる。例えば、1881年の記事(GF,30,29; GF,30,134-36)には、1879-80年の厳冬の植物への影響が報じられ、カールスルーエ(ドイツ南西部、ライン川に臨む都市)及びミュンデン(ニーダーザクセン州の都市、Fulda川とWerra川の合流点にある)で植栽されていたことが分かる。1888年の記事(MG,3,122)には、ドレスデン(ザクセン州の州都)で、12年を経たツタの例が示され、1891年の記事(MG,6,13-14; MG,6,71)には、ボーデン湖(ドイツ、オーストリア、スイスの国境にあるドイツ最大の湖)のマイナウ島、カールスルーエの宮園及びシュレーゲン(現在ポーランド南部の地方)のCamenz城での植栽例、1892年の記事(MG,7,8)には、ブレーメン(北ドイツ Weser川に沿う港湾都市)で1891年7月に開かれた造園博覧会に出品されたつり鉢に植えたツタの例、1897年の記事(MD,I,330; GF,46,349-50)には、東フリースラント(ニーダーザクセン州北部の北海に面する地方)のLütetsburg城の庭園及びダンツィヒ(現在ポーランドのグダニスク)の庭園での植栽例がそれぞれ記されており、少数とはいえ、地域的な広がりから見れば、ほぼドイツの全域にわたってツタの良好な利用事例があったことが分かる。

普及が進まなかったとはいえ、1890年代になると、普及の兆しは見え始め、1891年の記事(MG,6,71)には、種苗店で見かけるような、よく知られた若いツタという表現が見られ、当時ツタの苗が出回っていたことが窺える。1897年の記事(GF,46,541-42; ZG,15,247-48)には、造園促進協会の集会(1897. 9.30.)に、ベルリンのLorberg養樹園の経営者であるBrettschneider⁹⁾氏が、鉢植えのツタを出品し、協会から小銀メダルを授与されたことが報じられている。このとき、Lorberg養樹園は、ZG誌上に1897年10月2日、10月9日、10月16日の3回にわたって、ツタ(*Ampelopsis Veitchii* (*Vitis tricuspidata*))の広告を掲載した。Brettschneider氏の説明によれば、そのツタは、オランダでは、*atropurpurea*(暗い紫の意)と呼ばれる赤い葉の変種であり、アメリカから入手した種子から育てたとされている。このときから、実生から育てた鉢植えの苗が大量に供給され始めたことが窺える。また、既にツタが盛んに利用されていたアメリカから種子が輸入されていることは興味深い。

1900年の記事(GW,4,356)には、ツタは、今つる植物の中で、非常に人気があるとの記述がみられ、19世紀の終りになって、ようやくドイツでツタが広く普及し始めようとしていることが分かる。しかし、20世紀に入った1903年の記事(GW,7,243-44)には、まだ、ツタが相応に評価されることはあまりにも稀であるという記述や、多くの養樹園を探し歩いてもこの植物は見つからず、取り寄せなければならないとの記述、更に、市場に鉢植えの在庫が望まれるという記述が見られ、すぐには、どこにでもツタの苗があるという状況にはならなかったことが分かる。

ところが、1906年の記事(HG,8,Nr.17-4)には、ツタは、2、3年前から、大きな養樹園ならどこでも扱っているとされており、

1903年から1904年にかけて事情が大きく変わり、ツタの苗がどこでも手に入る状況になったことが窺える。1910年の記事(HG,12,160)には、ツタの種子は、年にもよるがキロ当たり8-12 Mk. 程度の価格で、いつも市場に出回っているとされ、種苗業者を対象にした記述と思われるが、ツタの需要が高まっていたことが窺える。また、この頃以降の記事には、雑誌の質問回答欄で、ツタの繁殖法が解説されているものが、いくつか見られる(1910年 HG,12,160; 1912年 GW,16,223; 1913年 GW,17,152-53; 1914年 MG,29,22)。やはり種苗業者間の情報交換の意味合いが強い欄であるが、このことからツタの需要の高まりを窺える。

1913年の記事(GK,15,94-95)には、最近十年間の間に、ようやく広く一般に普及したとの記述があり、このことから、1903年から1904年頃以降に、ドイツにおいて、ツタが急速に普及したことが分かる。

この時期の記事に見られるドイツでの植栽事例としては、ボンの植物園(1900年 GW,4,356; 1904年 MD,13,23), ゴーリンゲンの工場(1905年 GW,10,140)がある。また、1905年の記事(GW,10,140)には、南ドイツでツタが大いに利用されていることは、ダルムシュタットの展示会の際に、マインツやフランクフルトの周辺も訪ねた造園家なら誰もが納得できるだろうとされており、南ドイツでの普及が特に進んでいたことが分かる。

このようにドイツでツタが普及するまでには、記事の中で、外国でのツタの利用例が多く紹介されているのが特徴的であり、そのような情報の流入も、普及に影響したと考えられる。特に、早くツタが普及していたイギリスやアメリカでの利用の紹介は多く、イギリスは7件、アメリカは6件あり、その他、隣国の、スイス(4件)、ベルギー(3件)、フランス(2件)、スウェーデン(2件)における利用も紹介されている。1890年代以降は、写真による紹介も見られ、例えば、アメリカの住宅(1899年 MG,14,76-78; 1902年 MG,17,247-48)や、ロンドン郊外の住宅(1910年 GK,12,9)などの写真が掲載されている。

更にこの間には、次々にツタの品種が紹介されており、利用される品種が豊かになっていったことが分かる。主なものを挙げると、*Ampelopsis Veitchii purpurea* (1889年 GF,38,438-39), *Ampelopsis Lowi* (Syn. *Vitis inconstans Lowi*) (1908年 MG,23,261; GF,57,46-47), *Parthenocissus tricuspidata* (*Veitchii aurata*) (1908年 MD,17,216), *Ampelopsis Veitchii robusta* (1909年 GK,11,78), *Ampelopsis Veitchii gigantia* (1910年 MG,25,191-92) などである。

(2) 評価の視点

当時ツタが、どの様な点で評価されたのかについて、記事におけるツタに関する言及に基づき、以下にまとめる。この場合の評価とは、必ずしも良い評価を得ていたという意味ではなく、普及にあたって、どのような点が問題とされたかという意味である。

①耐寒性：耐寒性は、ドイツでの普及にあたって、最も問題となった点であり、全部で76件の記事のうち、27件で耐寒性について、なんらかの言及がなされており、そのうち否定的な見解を含むものは12件ある。ツタは、ドイツの気候下では、厳しい冬には被害を受けることがあり(1871年 WV,14,361; 1881年 GF,30,134-36)、このことが、なかなか普及が進まなかった原因の一つであると考えられる。長い間、実際以上に寒さに弱いと考えられていたが、その後植栽例が増えるにつれて、十分な耐寒性を持つことが明らかとなっていった。ただし、地域によっては、幼苗のうちは、被害を受けやすいので、保護が必要であるとされている(1897年 GF,46,349-50; GF,46,541-42; ZG,15,253-54)。

②付着力：壁面などへの付着力についての言及は多く、76件中22件の記事で付着に関してなんらかの言及がなされている。補助なしでしっかりと張り付くとされ、壁面などを覆わせようと

するとき、手間が要らないという観点から肯定的な評価をうけている。特にどんなものにも、ガラス面のような平滑な面にさえも張り付くということが強調されている(1885年 BZ,43,401-11; 1888年 WI,13,163; 1906年 HG,8,Nr.17-4; 1911年 GW,15,492; GW,15,614)。

③紅葉：紅葉についての言及も多く、76件中21件の記事で、なんらかの言及がなされている。その美しさは、既にドイツで広く普及していたアメリカツタに、匹敵するとの評価を得ていた(1883年 GZ,2,33-34; 1888年 WI,13,163)。アメリカツタよりも落葉の時期が遅いことも指摘されている(1903年 GW,7,243-44; 1904年 MG,19,251)。また、紅葉の際に、黄色、朱色、鮮紅色、深紅色、茶色など色彩に幅のあることが、各所で触れられている。

④生育速度：生育速度についての言及も比較的多く、76件中10件の記事で言及されている。概ね生育速度が速いことを肯定的に評価したものであるが、幼苗のうちは、十分に速く生育しないとの指摘(1888年 WI,13,163; 1913年 GK,15,94-95)や、アメリカツタほど速くは生育しないとの指摘(1895年 WI,20,386-90)もある。

(3) 利用形態

以下では、当時、ツタがどの様に利用されていたかについて、傾向を示すとともに、興味深い事例を採り上げる。

①壁面被覆：ツタの特性から、付着させる利用が多くなるが、その中でも建築物の壁面や塀などの面的広がりを持ったものを被覆させる例が特に多く、76件中39件で、なんらかの面的被覆について言及されている。塀、建築物の壁面、ベランダ、園亭、テラスの支持壁、岩壁など、さまざまな場所で用いられているが、特に興味深いものとして、ボンの植物園の屋外階段の例がある(1900年 GW,4,356)。階段の側壁や鉄柵を覆わせるだけでなく、階段の蹴上の面をも覆って葉を茂らせ、踏面は空いたままで利用には差し支えない状態で、言わば緑の階段となっている。

②柱状物の被覆：樹木、枯木、柱などの柱状物を被覆させる例が、3件の記事で言及されている(1873年 GF,22,198; 1903年 GW,7,243-44; 1909年 GK,11,78)。特に興味深いのは、単に装飾的な意味合いだけではなく、林縁や伐開地に立っているため、日照りにさらされる樹木を守るためにツタを絡ませるとしている例である(1909年 GK,11,78)。

③つり鉢：特殊な例ではあるが、ツタは特につり鉢に向くとされ、7件の記事で言及されている(1888年 MG,3,122; 1891年 MG,6,256; 1892年 MG,7,8; 1895年 MG,10,440; 1896年 WI,21,223-24; 1897年 GF,46,541-42; 1897年 ZG,15,247-48)。つり鉢から長く枝垂れさせた若い枝の、テクスチャーの細かい葉群を觀賞した。

④装飾品としての利用：切り枝を飾ったり、花輪に用いる例が3件の記事で言及されている(1888年 MG,3,122; 1891年 MG,6,256; 1897年 ZG,15,253-54)。

(4) 繁殖方法

繁殖は、挿し木、接ぎ木、実生のいずれでも行なわれていたが、これらの繁殖法の変遷が、ドイツでの普及に影響している。

19世紀中には、挿し木が容易であるとの記事(1888年 MG,3,122; 1892年 MG,7,8; 1896年 WI,21,223-24)が見られる一方で、初期生育をよくするため、アメリカツタとの接ぎ木や根接ぎが採用されたとの記事(1888年 WI,13,163)や、ツタの繁殖はアメリカツタのようには容易ではないとの記事(1897年 GF,46,349-50)も見られる。従って、挿し木による繁殖は、質的にも量的にも充分なものではなかったことが窺え、そのことが普及が進まなかった一因と考えられる。

その後、先に述べたように、1897年に、鉢で大きくした実生

苗が売出され、その苗は定植後の芽吹きも確実であるとされている(1897年 GF,46,541-42)。また、1910年の記事(HG,12,160)では、効率の良い繁殖法は、実生繁殖であり、種子が市場に出回っているとされている。従って、この頃には、実生繁殖により、質的にも量的にも充分なツタの苗を供給することができるようになっていたことが窺え、そのことが、1903~1904年頃以降ツタが一般化することになった一因ではないかと考えられる。

しかし、接ぎ木苗は、実生苗より生育がよいとの意見もあり(1910年 MG,25,191-92)、また、その後の雑誌の質問回答欄では、ツタの繁殖法についての質問に対して、アメリカツタを台木とする接ぎ木が最もよいと回答されているので(1912年 GW,16,223; 1913年 GW,17,152-53; 1914年 MG,29,22)、接ぎ木による苗の供給もかなり行なわれていたと推測される。

4. まとめ

ドイツへのツタの伝播と普及に関し、次の事が明らかとなった。

(1) ドイツへは、1859年以前に、ツタが伝播していた。

(2) 1868年、イギリスのヴィーチ商会から売出されたツタは、すぐにドイツに導入された。

(3) 1870年頃には、ドイツでは、複数の名前で売出されていた。

(4) 19世紀中には、植物園や大庭園などで、少数の良好な利用例があるが、普及は進まなかった。

(5) 1903~1904年頃から、ツタが市場で普通に見られるようになった。

(6) 第一次世界大戦前までには、広く普及し、とくに南ドイツで多く利用されていた。

(7) 最初は、耐寒性がないとみなされていたが、徐々に耐寒性があることが明らかになった。

(8) 紅葉、付着力の強さ、生育速度の速さは、肯定的に評価されていた。

(9) 主として、壁面や樹幹の被覆に利用され、つり鉢や花輪にも利用された。

(10) 繁殖は、挿し木、実生、アメリカツタへの接ぎ木で行なわれていたが、挿し木の結果は、よくなかった。

補注・文献

- 1) 浅井康宏(1993): 緑の侵入者たち 帰化植物のはなし(朝日選書 474): 朝日新聞社, 132, 東京
- 2) 文献検索の方法については、拙稿(1999): ランドスケープ研究 62(5), 489-494. の補注3) に記した方法と同様である。
- 3) Bretschneider, E. (1898) *History of European Botanical Discoveries in China*. I, II, p.552, 685, Press of the Imperial Russian Academy of Sciences, St. Petersburg, (Reprint, Zentral-Antiquariat Der Deutschen Demokratischen Republik, Leipzig, 1981).
- 4) 造園・園芸関係雑誌の選択にあたっては、まず、植物学関係の文献目録(Bailey, L. H. (1922) *The Standard Cyclopaedia of Horticulture*, vol.5. の文献欄, Rehder, A. (1912, 1915) *The Bradley Bibliography*, vol.2, vol.3., Rehder, A. (1949) *Bibliography of Cultivated Trees and Shrubs*, 及び原寛(1954): 日本種子植物集覧 第三冊,

pp.135-137, 岩波書店)で、ツタの記事が掲載されている雑誌を選び、更にそれらの継続前誌を選んだ。また、学術情報センターのNACSIS Webcat. を用い、タイトルにGart-で始まる単語を含む雑誌を検索して、関連するものを選び出した。

5) 検索に用いた学名は、各種の異名があることから、属名 *Ampelopsis*, *Cissus*, *Parthenocissus*, *Vitis* に対し、種小名 *inconstans*, *japonica*, *Roylei*, *Royleana*, *Thunbergii*, *tricuspidata*, *Veitchii* 或は、本来は品種名である *Lowii* が組み合わせられたものである。これらは、上記の補注4) に示した文献目録を参考として決定した。また、それらの組み合わせのうち記事内容から別植物と判断されるものは除外した。

6) Bean, W. J. (1921) *Trees and Shrubs Hardy in The British Isles*, Vol. II, 3rd ed. (1st ed., 1914), p.672, John Murray, London. に、ツタ (*Vitis inconstans*) が、J. G. Veitch によって、1862年頃導入されたことが記されているのを始め、

幾つかの図書資料中にこの年代が見られる。

- 7) ザクセンのピュックラー・ムスカウ侯が構築したもので、当時、ネーデルランドのフリードリヒに譲渡されていた。(岡崎文彬(1969): ヨーロッパの造園: SD選書 43, 232-234, 鹿島出版会)
- 8) *Ampelopsis Roylei* Hort. という名称は、末尾の Hort. が示すとおり園芸上のもので正式の学名ではない。このため、ツタ以外の植物、例えばアメリカツタのことをこの名で呼ぶ場合もあったので注意が必要だが、ムスカウの樹木園に植栽されていたものについては、その後、出版された図書(Petzold, E.C.A. and G. Kirchner (1864) *Arboretum Muscaviense*, p.152, Gotha.) にその形質が記載され、上記の補注4) に示した文献目録において *Parthenocissus tricuspidata* の異名とされている。
- 9) 上記の3) の文献の著者と綴りが似ているが、別人である。

Summary : Japanese Ivy (*Parthenocissus tricuspidata*), a native of East Asia, has now become one of the ornaments in Western Landscape. The objective of the study was to explain the early process of the introduction and spread of this plant to Germany, based on the articles of gardening or horticultural magazines published in the latter half of the 19th century and at the beginning of the 20th century. The results were as follows:

- 1) Japanese Ivy (as *Ampelopsis Roylei*) was introduced to Germany before 1859. ; 2) Japanese Ivy (as *Ampelopsis Veitchii*), which was put on the market by Messrs. J. Veitch and Sons. (U. K.) in 1868, was introduced to Germany immediately. ; 3) About 1870, Japanese Ivy was on the market in Germany under some different names. ; 4) By the end of the 19th century, it was planted effectively in some botanical gardens and parks, but not popularized. ; 5) Since 1903~1904, it has been common on the market. ; 6) Before World War I, it became widespread, especially in the South of Germany. ; 7) At first Japanese Ivy was considered to be tender, but gradually it proved itself to be hardy. ; 8) Its autumn colors, adhesive power and rapid growth were appreciated. ; 9) It was used mainly for covering walls and tree trunks, and also for hanging pots and wreaths. ; 10) It was propagated by cutting, seedling and grafting on Virginia creeper, but the result of cutting was not good.